

2009年 春学期のまとめ

□ ワシントン州ろう学校での現場実習（インターンシップ）

ワシントン州ろう学校には、小学部から高等部まで合わせて約150人くらいの生徒が学んでいる。このろう学校には、スクールカウンセラーとスクールソーシャルワーカーとスクールサイコロジストがそれぞれ一人いる。一般的に、多くの人がスクールソーシャルワーカーとスクールカウンセラーそれぞれの役割や職務について混同しやすいが、ワシントン州ろう学校においては、両者において特に大きな違いはなく、それぞれ担当する生徒に対してケースマネジメントとカウンセリングを行っている。具体的には、スクールカウンセラーは小学生と中学生を、スクールソーシャルワーカーは高校生を担当している。一方、スクールサイコロジストは、小学生から高校生まですべての生徒に対して、主に心理テスト・学力診断テストを行い、その結果の分析および評価をスクールカウンセラーとスクールソーシャルワーカーに説明するという役割を担っている。

ワシントン州ろう学校では、白人とヒスパニック系アメリカ人の生徒が大半を占めていたが、アフリカ系アメリカ人、アジア系アメリカ人、インディアンなどの生徒も学んでいる。一方、教師やその他スタッフに目を向けてみると、ほとんどが白人であった。これからは、白人以外の人種の教師やスタッフがもっと増えることを祈っている。

多くの生徒が日曜日から木曜日までをろう学校のコテージ（寄宿舍）で、週末はそれぞれの実家で家族と暮らすという生活を送っている。コテージは全部で6つあり、それぞれ、トイレ・シャワー付きの2人部屋が7つ、キッチン、リビングルーム、事務所がある。コテージには、**Student Life Counselors** というスタッフがいて、彼らが生徒のコテージにおける生活の面倒を見ている。

僕は、1月5日から5月1日まで、スクールソーシャルワーカーの監督の下、現場実習を行った。一学期に500時間の実習を行う必要があり、それを16週間で終わらせる必要があった。そこから逆算して、週に4日、1日8時間働くこととなった。また、実習中、僕は、実習生やスタッフ、あるいは、何らかの目的で学校を訪問する生徒の家族のために貸し出しされる部屋で生活を送ったが、無償でその部屋に住まわせてもらう代わりに、さらに週に10時間、放課後に行われる課外活動にボランティアとして参加したり、夕食後のホームワークの時間にコテージに足を運び、生徒のホームワークの面倒を見る必要があった。その結果、週に月曜日から木曜日までの4日間の間に42時間付きっきりで生徒たちの面倒を見ることになった。目が回るほど忙しかったが、おかげでコテージにおける生活と学校における生活の相互関係を把握することができ、ろう学校の寮生活における生徒の成長過程を考えるのに良い機会であった。

本来ならば、スクールソーシャルワーカーの職務内容は、カウンセリングだけでなく、ケースマネジメントも含まれるが、ケースマネジメントを行うに当たっては、どうして

も車の使用が必須である。しかし、残念ながら、何らかの規定により、実習生にはろう学校の車の使用が認められないということであったため、その結果、主にカウンセリングを任せられることとなった。相談にのった生徒の数は日によってばらつきがあったものの、毎日、小学生から高校生まで必ず誰かが来て、彼らの悩みや心配事を聞いたり、一緒に問題を解決するためにはどうしたらよいか考えたりした。生徒のニーズによって、毎週定期的にカウンセリングを受ける生徒もいれば、必要に応じてカウンセリングを受ける生徒もいた。また、普段、カウンセリングを受けないような生徒もこちらからたまに呼び出して話を聞くこともあった。

一口にろう・難聴の子供といってもいろいろな生徒がいるものである。ワシントン州ろう学校にはどんな生徒が学んでいるのか、以下に例を挙げてみたい。

1. ろう学校である以上、生徒同士のコミュニケーションに特に問題はないが、週末に家に帰ると、家族とうまく意思疎通を図ることが出来ないという生徒
2. 自分がろう者であることをなかなか受け入れることが出来ない生徒（特に、高校生に多かった。）
3. 幼稚部からずっとろう学校に通っている人もいれば、途中で通常の学校から転校してきた生徒もいる。通常の学校から転校してきた生徒の中で、環境の変化に適応できず、通常の学校に戻りたいという生徒
4. 視覚障がい、脳性まひ、自閉症、小人症、注意欠陥過活動性（いわゆる、ADHD）を持つ生徒
5. 様々な理由により、英語の読み書きに苦労している生徒
6. よい人間関係を作る能力、コミュニケーション能力、自立した生活を送る能力を身につける必要のある生徒
7. うつ病など、精神的に問題のある生徒
8. 違法薬物に依存している生徒
9. ゲイ・レズビアンなど、性的思考について悩んだり、そのためにいじめに遭ったりしている生徒
10. 他の国で生まれ、アメリカに移住してきた生徒（ロシア、メキシコ、韓国、グアテマラ）
11. アメリカ市民権（あるいは、社会保障番号）を持っていない人
12. 経済的に恵まれない家庭の生徒
13. 両親の離婚や別居などに伴う家庭環境の変化に適応できずにいる生徒

実習のはじめに、実習生としての自己紹介の手紙を生徒の家族に送り、その後もメールなどを通じて、定期的に連絡をとるなど、生徒の家族との信頼関係構築にも努めた。

生徒だけでなく親の要望にも耳を傾けることもスクールソーシャルワーカーの大事な役割の一つであった。

また、実習を行うに当たって、一対一のカウンセリングだけでなく、グループによるカウンセリングも行う必要があったが、Gallaudet 大学の教授とろう学校のスクールソーシャルワーカーと相談した上、ヒスパニック系アメリカ人の高校一年生4人でグループを作り、グループカウンセリングを行うこととなった。グループカウンセリングとは、共通の経験を持つ同士で構成され、それぞれの経験を語り合いながら、具体的な対応を考えていくのに有効なカウンセリングの手段の一つである。彼らは、メキシコ、グアテマラ、ドミニカ共和国で生まれ、家族と共にアメリカに移住してきたり、あるいは、アメリカ人に養子として引き取られた人たちである。家族と共に移住してきた人たちは家ではスペイン語を話し、学校では英語を学ぶというバイリンガルの環境におかれている。このグループカウンセリングには様々な目的があった。自分に対する自信を持つ、ろう者としての、または、ヒスパニック系アメリカ人としての、アイデンティティを持つ、コミュニケーション（会話）能力を伸ばす、いい人間関係を作るための能力を伸ばす、などなどである。このグループカウンセリングは、3月から4月にわたって6週間、週に1回行った。週ごとに異なるトピックを設定し、それについて話し合った（「ヒスパニックの文化」「ろう文化」「家族」「友達」「恋愛」「将来の夢」など）。エンパワメントの観点から、初回のグループカウンセリングのときに生徒自身に話し合いのルールを設定させ、その後は、それにしたがって参加できているかどうかグループの「外」から見守りながら、すべての生徒にとって有意義なグループカウンセリングが行われるように努めた。

また、その他にも、高校2、3年生を対象に卒業後の進路についてカウンセリングを行っている先生に高校生を何人かを割り当てられ、進路相談に関するカウンセリングも行った。生徒に進路に関する複数の適性診断テストを受けさせ、その結果を踏まえながら、卒業後の進路について一緒に考え、最終的に生徒自身が進路を決められるようにカウンセリングを行った。また、奨学金や学生ローンに関する情報も提供し、それらの申込書の記入方法についても必要に応じてサポートを行った。

実習中、仕事が終わった後、必ず、一日一日の記録をまとめ、ろう学校の実習の責任者に報告する義務があった。小学生と中学生についてはカウンセラーに、高校生についてはソーシャルワーカーに、相談にのった生徒の名前、相談内容、援助の方法など、細かくまとめておく必要があった。定期的に、カウンセラーとソーシャルワーカーとそれぞれ、個別のミーティングを設け、フィードバックをいただいた。やはり、二人ともろう学校での経験が長いので、大変貴重なアドバイスをいただくことが出来た。

□ インターネットを使った授業

この春学期は、ワシントンろう学校での現場実習のほかに、インターネットを使った授業、いわゆる、オンラインのクラスを二つ受講した。一つは、Advanced Practice Seminar (SWK780-01) で、もう一つは、Social Work Licensure Preparation (PST895-0L1) である。前者は必須科目であり、これまで学んできたことの総ざらいといった感じで、ケースメソッド形式で行われた。つまり、それぞれのケースにどのような理論が適用され得るか、ケースに登場する重要人物への援助方法についてはどんなものがあるか（ミクロ、メゾ、マクロ別に論じる）、クライアントを援助するにあたって、浮かび上がる倫理問題は何か、またそれをどのように解決するか、選択した援助方法の成果の評価にはどのようなものがあるか、それぞれのケースにどのような法律問題があるか、もしあるとしてそれをどのように解決するか、などといった質問にインターネットを通じて回答する必要があった。週によってテーマが変わり、クラスメイト全員が交代しながら他のクラスメイトの回答に対して質問・感想などを付け加える必要があった。ネットに投稿されたクラスメイト全員の回答を読み、似たような内容でありながら、いろいろな英文の書き方があるということを知り、大変参考になった。一方、後者は、選択科目であり、文字通り、ソーシャルーカーのライセンス（資格）をとるための勉強方法、ノウハウを学んだ。インターネットで、Gallaudet 大学教授の手話による短いレクチャー（5-10分程度）のビデオをみることが出来るシステムになっており、各自、指定日までに自分の都合の良いときに該当のビデオを閲覧し、それに付随していた小テストに回答するというものであった。このように、いつでも自分の見たいときにインターネットで手話によるレクチャーを何度も見れるということは、これまでに経験したことがなかったので、新鮮な気分であった。